The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国の大学での観光業インターンシップに対するJOPの観点からの再考ー学生、メンター、および教師への調査からー
Author(s)	王, 健
Citation	大阪大学, 2019, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　王　健　　）	
論文題名	中国の大学での観光業インターンシップに対するJOPの観点からの再考 －学生、メンター、および教師への調査から－

論文内容の要旨

中国の大学では、日本語で日本人観光客にサービスを提供できる観光ガイドを養成するため、一般日本語に加え、観光案内の専門知識を日本語で学習する教育課程が設けられている。本研究の目的は、中国の大学における観光日本語教育の改善点を検討することである。

第1章では、研究背景として公的機関が公表した観光データに基づき、日本から中国への観光客の動向を明らかにし、中国における日本語観光ガイドの需要を示した。中国における観光日本語教育の現状と課題についての先行研究では、インターンシップをさらに教育上活用する必要があると示唆されているが、それに関する具体的な議論はなされていない。そこで、本研究では、専門日本語教育の観点から観光日本語教育を受ける学生が経験した観光業インターンシップの活動を取り上げ、メンターや教師の見解を踏まえつつ、中国の大学における観光日本語教育の改善にとって何が重要かを明らかにする課題を設定した。

第2章では、本研究で扱う「専門日本語教育」と「観光日本語教」について論じた。まず、専門日本語教育に関する先行研究を概観し、本研究における観光日本語教育を専門日本語教育の下位領域にある職業目的のための日本語教育（以下「JOP」）に位置付けられた。また、観光日本語の使用者ごとに観光日本語教育について分類を行い、観光日本語と観光日本語教育について再定義を行った。

第3章では、従来の日本語教育、大学における観光日本語教育と中国の大学での観光業インターンシップに関する先行研究を考察した。それらの先行研究の課題を踏まえて、本研究では、大学教育であまり活用されていない、観光日本語学科の学生が経験した観光業インターンシップに着目し、学生、観光会社のメンター、そして観光日本語学科の教師の三者をそれぞれ対象にインタビュー調査を行った。インターンシップにおける学生が抱える困難点をもとに大学での教育を考え、学生に必要な教育と支援方法について考察した上で、JOPの観点から、観光業インターンシップについて再検討し、中国の大学における観光日本語教育の改善に向けた知見を得ることとした。

第4章では、調査の概要として、調査地の選定や調査協力者の情報、調査の方法と質問項目を記述した。

第5章では、本研究にける調査協力校の観光日本語学科が実施するインターンシップ実施前後での学生の活動を、実施前、実施中と実施後の3つの段階に分けて、それぞれの詳細を説明した。

第6章では、インターンシップでの学生による観光案内文の作成に焦点を当て、学生が実際に作成した案内文や観光案内文の作成に関する内省や反省、学生・メンター・教師へのインタビュー調査の結果に基づき、議論を行った。その結果、学生は観光案内文の作成では案内文の内容と語彙に関する課題を抱え、情報の追加、言い換えと削除の方法を用いて独自に対応していた。メンターは、案内文の丸暗記を禁止し、観光客の視点に立った観光案内文の作成、内省の促進などで支援していた。教師は、教科書の案内文の暗記が重要で、それ以外の指導は現実的に難しいという考えを示した。観光案内文の作成に向けた今後の観光日本語教育では、大学と観光現場を接続するという観点を強化し、観光案内文の作成に対する教育の再考、教育・支援におけるメンターと教師の協力、および、インターンシップに関する教師の役割の再検討を行う必要があるという3点の知見が得られた。

第7章では、学生によるインターンシップでの「沈黙」の回避を事例として扱い、雑談での「沈黙」を回避するために必要な教育と支援方法を論じた。学生は初対面の日本人観光客とのコミュニケーションにおいて、会話の開始方法や適切な話題の選択、興味を持たせる会話の継続方法に関する問題を抱えていた。「沈黙」の原因について、学生は会話能力の不足と現行の大学教育の内容の不十分さであると考えていた。沈黙を回避するため、メンターによる案内を観察し、その内容と方法を模倣する方策を講じたが、メンターとの圧倒的な日本語能力と実地での経験の差があり、観光客と自然に会話することが困難であった。そこで、他社でのインターンシップに参加した学生との協働学習を行うことにより、「沈黙」の問題解決を図った。メンターは観光案内を行う中で観光客への柔軟な対応の見本を学生に

示したが、その具体的な会話継続の方策などは提示せず、学生自身の日本語能力と経験に合わせた案内方法を自ら考えるよう促していた。しかし、雑談での話題選択と会話の継続は観光客の年齢や趣味、案内を行う学生との親疎関係などの背景によって異なり、実際に観光客に会わなければ判断しにくい。こうした事前に予測不能の状況に対応する知識や方法を、教育内容の中に具体的に、かつ、固定的なものとして取り入れることは事実上困難である。そのため、今後の観光日本語教育では、観光現場での様々な予測不能な課題の解決のために、受動型の学習から自律的学習とコミュニケーション志向への転換が必要であると考えられる。

第8章では、学生の異文化理解に焦点を当て、学生・メンター・教師へのインタビュー調査の結果など、学生が抱える課題とその対応策、異文化理解に関するメンターと教師の見解を明らかにし、観光日本語教育における異文化理解についての改善点に関する議論を行った。その結果、学生は観光案内における日本人観光客とのコミュニケーションにおける物事に対する日中間での捉え方の違いについての課題を抱え、日本人観光客の主張を受け入れて別の話題に切り替えるという方法を一律に用いていた。メンターは観光案内における異文化理解の必要性に言及しているが、観光客との意見の対立を回避する対策を学生に示している。教師は学生が物事に様々な見方があり、観光案内では異文化を理解する必要があると述べる一方、現行の異文化理解の教育に関与せず、日本人教師を媒介として学生に日本の文化を学習させている。今後の観光日本語教育では、日本人教師の学生への異文化理解を促す働きかけ、異文化理解のための学生同士の協働学習、中国人教師の役割の再検討、という3点が必要であると考えられる。

第9章では、以上の考察をもとに、中国の大学における今後の観光日本語教育のあり方に対する提案をまとめた。

まず、観光日本語教育の改善には、インプット型からアウトプット型への学習姿勢の転換が必要である。現行の観光日本語教育では、受動型の学習活動が行われている。第6章における観光案内文の作成での大学教育では学生による教科書に掲載された案内文のインプットが主となっている。今後の大学教育においては、教師は学生に自ら体験的、実践的に学習していく能動的な学習姿勢を醸成ことが重要であると考えられる。また、インプットからアウトプットへの学習姿勢の転換は、観光案内文の作成以外に、「沈黙」の回避と異文化理解に向けた今後の観光日本語教育の改善にも有用なものである。教師は、大学教育で語彙などの知識の増加によって、コミュニケーション能力が向上すると期待しているが、日本語能力試験や観光ガイド資格検定のための語彙習得に繋がっていることが明らかになった。現状では日本人教師に依存し、日本文化や習慣、マナーなどの習得を主としていることが分かった。大学教育では、単なる言語知識の増加と日本の文化・マナーの知識に関する教育ではなく、例えば中国人教師と日本人教師との協力により、学生が具体的な体験によって、「沈黙」を回避する方策、および異文化理解に関する自分の不足点に気付くような教育活動を行うことが重要である。

次に、観光日本語教育の改善には、コミュニケーション志向への転向が必要である。これまでの教育では、教師は日本語能力試験やガイド資格取得のための大量の知識を一方的に提供し、学生にそれらを暗記させる方法を使用している。しかし、学生はインターンシップを経験することによって雑談での「沈黙」を回避する際の困難さを認識した。言語学的な知識の暗記のみならず、コミュニケーションを志向した教育への転向が求められる。雑談における「沈黙」の回避だけではなく、観光案内文の作成と異文化理解に向けた今後の観光日本語教育においては、コミュニケーションを志向した教育が重要である。ガイドは観光客とのコミュニケーションを通して、事前に準備した観光案内文の内容追加と調整を行うこともあり得る。また、学生は日本人観光客とのコミュニケーションが深まれば、雑談での話題の展開とともに、学生の異文化理解への認識がさらに深化することも期待できる。それらに基づいたコミュニケーション志向への転向は、雑談での「沈黙」の回避のみならず、観光案内文の作成と異文化理解への促進にも有用に働くと考えられる。

さらに、異文化理解に向けた観光日本語教育の改善には、複眼的思考の強化が必要である。第8章では、学生は日本人観光客とのコミュニケーションにおいて、物事に対する価値観の違いについての課題を抱えていることが明らかになった。異文化理解に関する現行の大学教育は、日本の文化や習慣、マナーなどの教育を主として行われており、観光現場にとって真に必要な異文化理解との隔たりが存在していることが分かった。異文化理解は、案内文の作成や雑談における沈黙の回避にも関係するため、今後の観光日本語教育では、学生の視野を広げて、世間における多様な価値観の存在を意識させることが重要な課題であると考えられる。大学教育では、可能な限り、学生に多様な価値観に触れさせることができれば、学生は価値観の多様性を認めるのみならず、自文化主義的な発想を越えて、さらに新たな価値観の生成に繋げることも可能であろう。

本研究の意義は、インターンシップを大学での観光日本語教育につなげ、中国における当該教育に関する研究の不足を補い、学生に必要となる教育と支援方法の再検討に有用な知見を提供することである。また、JOPの観点からインターンシップでの事例を分析するため、本研究で得られた成果は、観光日本語教育のみならず、JOP教育およびインターンシップの履修が必須である、ほかの職業目的を達成するための専門日本語教育にも応用することが期待できる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　王　健　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	村岡貴子
	副 査	教授	山 下 仁
	副 査	准教授	力武京子

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の大学における観光日本語教育の専門課程で行われている観光ガイドのためのインターンシップの事例を取り上げ、当該の大学の学生、教師、およびインターンシップ先のメンターを対象としたインタビュー調査の結果や、学生が作成した観光案内文などのデータをもとに、現状での観光日本語教育の課題を明らかにし、その教育の改善のための知見を得ることを目的としている。

本論文の序論では、日本から中国への観光客の増加や、観光を通じた交流のニーズの増加に伴って、日本語が運用できる中国人観光ガイドの必要性を、先行研究や各種公的機関が発表したデータをもとに丁寧に論じている。こうした観光ガイドを目指す観光日本語専攻の大学生にとって、インターンシップは、専門教育と社会をつなぐ重要な役割を果たす存在であるが、従来ほとんど研究が行われていない。本論文は、大学の専門課程の最終段階にあって重要な位置を占めるインターンシップに着目して貴重な考察を行ったという新規性と独創性が指摘できる。

また、本論文では、専門日本語教育の枠組みで議論を進めており、それに際しては、多数の先行研究を読破し、観光日本語教育をJOP(Japanese for Occupational Purposes)と位置付けている。先行研究は、観光日本語としての語彙の言語学的分析や、諸外国での教育実践の報告、さらには英語教育学の枠組みでのインターンシップに関する論文にも目を配り、本論文が依拠する理論的な基盤を固め、かつ各研究の足跡を十分にたどって言語化できている。

さらに、本論文の特に評価すべき点は、従来、どの研究も着手できていなかった、観光案内の場面における種々の活動とコミュニケーション上の問題、およびそれらに影響する現行の教育方法などを、1）観光案内文の作成、2）インターンシップでの「沈黙」の回避、3）観光客との異文化理解、という、きわめて興味深い事例の抽出に成功し、学生・メンター・教師の三者の異なる見解を丹念に記述し、さらには現行教育への批判や提案、また学生の学びと成長についても考察を行ったことである。1)の観光案内文の作成では、その改訂作業をめぐり、試行錯誤する学生本人の内省や、案内文の暗記では観光現場では対応が困難な場面を、個々の事例を読み解き浮き彫りにすることによって考察を深めている。同時に、学生・メンターとは対照的な教師の信念についても鮮やかに記述されていた。すなわち、インターンシップ上の困難点や課題を、JOPの観点から理解することなく、伝統的な言語学習方法としての基本的なモデル文暗記を推奨し、大学外での経験の蓄積が現場で有用となるという固い信念である。また、2)では、メンターによる円滑なコミュニケーションの様子とは異なり、学生が、観光場面で気まずい印象すら与える「沈黙」について葛藤し、話題選択や雑談の継続に関する問題に対峙し奮闘する様子も、巧みな記述によって説得力のある議論を展開した。3)の異文化理解は、大きなテーマではあるが、具体的な事例に基づき、サービス業としての観光ガイドが、異文化接触の場面で不要な対立を避けるべく、自文化と異文化への各々の解釈の差異に直面し、観光客への配慮を最優先しつつ業務を遂行する様相が描かれ、種々の議論が行われている。本論文は結論として、インプット型からアウトプット型への学習姿勢の転換の必要性を説き、また、コミュニケーション志向の教育を促す必要性を主張し、さらに、異文化理解に必要な複眼的思考の強化が重要であるとまとめている。

本論文は、以上のように、独創性を持つテーマのもと、観光日本語教育に関する新たな研究の局面を切り拓いた優れた論文である。欲を言えば、他の専門日本語教育への示唆についてもさらなる知見が提示できれば、一層論文の質を高めたと思われるが、それは本論文の価値を損なうものではなく、今後の研究に強く期待するところである。以上のことから、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。